

彌

和書門

和書門			
九	六	二〇七五	類
冊	架	函	號

内閣文庫		
二〇七五	和	書
二函	冊	架

内閣文庫		
番號	和	20775
冊數	9 (6)	
函號	202	192

たりにわねの

七



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

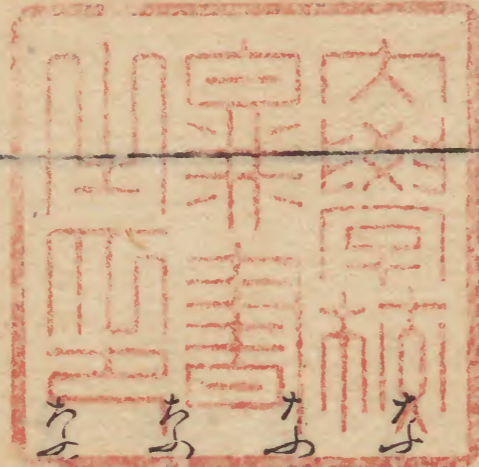


© Kodak, 2007 TM, Kodak



冠辭考卷七

奈爾奴禰能



○奈部 六

なふかしの

なつさの

なみぐもれ

なぐさの

なぐこもれ

なつそり

なぐほり

なせけの

なつごらも

なまよも乃

○爾部 五

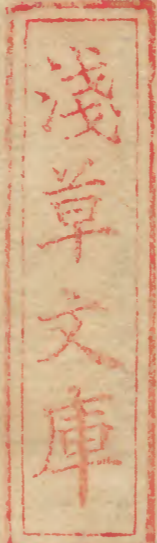
みりぢり

みほぢりの

みせい

みりぢり

みん



○奴部 四

ぬはどり

ぬえとどり

ぬえとれ

ぬえくま

[Faint handwritten text, possibly bleed-through from the reverse side]

○奈部

冠辭考卷七

奈爾奴彌能

(一) 奈部

なろるかえり

[Small handwritten note]

萬葉卷七

[Small handwritten note]

動神之音耳聞卷向之檜原山乎

今日見鶴鴨

[Small handwritten note]

おい音とつらん料のともがくべ山のり

なろるき事なもこめて、鳴かそれと冠せしなろる下

古事記

[Small handwritten note]

美知能斯理古波陀袁登賣袁迦微

能基登

[Small handwritten note]

岐許延斯迦杼母阿比麻久良麻久とあ

れか上つ世の冠辭ハ改の語よめるのそあて能基登

こころのつらみよりしを。飛鳥の春原のまれおらばをりてハ。
 漸さるるさほちりも出まふらり。又見入るる。又見入るる。
 卷向山ハ既出たり。義知能斯理云云ハ日向國諸縣郡古波
 陀をつら日向は前後ありねど西の風
 のさくさればハ
 とうなすむ

なぐこそる

まじまじしや
 こころにさけ

萬葉卷三よ。新羅尼理預ハ大伴宿禰の 哭見成慕来座而

卷五よ。大伴旅人卿帥めて妻ト大 斯良農比筑紫國雨泣

子那須斯多比枳摩斯提云云。これいみじかり子れたの

きて母志くふふゆみておくる冠禰

○卷十三よ。挽 哭見如言谷不語云云。こころいふまゝいものもえ

いさぬ禰の現よ〜と死ていさぬをいさぬの
 三首をえて成如るもれ字を奈須とよみて即めて
 奏するをい〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 ころぬらひ物つよを〜と〜と〜と〜と〜と〜と
コトハナキ
 神代紀よ。磐根木株草葉猶能言語とつり。

なゆ〜げの

こころいさぬ
 みこと

万葉卷二よ。阿部 秋山下部。田妹奈用竹乃。騰遠依子

等者卷三よ。各 湯竹乃。十緑皇子云云。こころをさるる女

方姿とたよゆらるる竹よ。冠をせりなゆ竹ハ女竹

よて。こころいさぬ。こころいさぬ。こころいさぬ。こころいさぬ。
まじまじしや
 且と

をよるも、大石持命 打竹之登登遠遠登登遠遠通疊字をかくて、例ハ
を祭詞 古一の獻タテマシ 天之真魚咋也ナカヒ もあり。

なつくさ乃

是六日午紀三奉
衣通州八別

古事記先恭條衣 那都久佐能阿比泥能波麻能云云通玉の奇

夏草ハ茂く長くてあるもの、さしハさくよ、萎伏を

てお祓の讀よひうけ多いつ。お祓のねハ 萬葉卷十下旋出

新室壁草薊通御座給根草如依逢未通女者公隨この四

五の句をもち

是六日午紀三奉
衣通州八別

○卷三下人万 珠藻薊敏馬乎過夏草之野島之埼通舟

迎著奴も右も向く。夏草のちゆるとも、

ぬとつげり中も奉る奴延久佐能賣通志の禮

婆といへるも、奴ハ奈延を約めし語も今も向く。

を、それ稱を奴も通ひし事、ハ祓也 祓也也也、注し、

守と訓も、延布須 延布須と、延布須 延布須と、

子奉つ、土佐日記も、阿波の野島をぬま、

比もて、古語の味けり人。

○万葉卷二下人麻 夏草之念之奈要而志怒布良武、

草乃思之萎而云云。オモヒ 夏草ハさく弱かれ

ハさくよ、さくよ、人の物おもひ、

名、ナ、カ、ツ、キ、ヌ
カツキ
ヌ
カ
ツ
キ
ヌ

湯沐命ツカガミ湯沐命ツカガミ湯沐命ツカガミ

訓て語のお似れが字も訓も借るる。命號ハ號令より回しを

且貯をまげり訓ハ設をまげりむむは回一も借字

て向ムカりまきしむむハ集中より方設而ハ方設而ハ向ムカる

夕方設而ハ夕ツキへむけて夕ツキハ項片向ムカし。今本ハ命號貯の三

一ハ何のまきしむむはえすま引のて下げしる例もむむむむ

海上涵ハ和名抄も上總國ハ海上郡あり涵ハこの地

べをり又武藏もあよりむむむむむむ海へむむ

ウ集中ハ浦へむむむ備をむむむむむむむむむ

むむ條ハ武藏も九首ありハその地の名ありむむむ

むむ海へのむむむむむむむむむむむむむむむむ

るよ地の名のあり一考ふべし。

古語拾遺ハ天雷命殺を殖てよき森のまきあり

總國ハ穀布木のまきより信濃郡よりむむむむむむむむむ

なつごころもむむむむむむ

こハ古きまきよハみえむ後世のまきありむむむむむむ

る振をまよハ後の人乃語ハあむむむむむむむむむむむ

系もてあるハ片織カタオリとてけるし且そのかむ於射の

多於の反也むむむむむむむむむむむむむむむむ

さり。帷をかむむむむむむむむむむむむむむむむ

る布をりむむむむむむむむむむむむむむむむ

まハ古きをむむむむむむむむむむむむむむむむ

てむ引べし。

香取浦とハ下総國香取郡多良郷ありの海をいふ

あつこもれ うらうづま

萬葉卷十三よ浪雲乃愛妻跡不語別之来者云云この浪雲

こは遠よ那備之借字も摩藻乃了よ意なるべし奈美と奈備と通ふは

神並とらひ押あびげを押あみさうら類ひま

きり且かくて根子字を借はま十三よ天者一も長もかもさ

山もさうらがもてよを天橋文長雲鴨高山丈高雲鴨了類ひ

さうらさ摩藻のうらう妻といひさる意は卷二よ吾王乃立者

藻之如許呂即者川藻之如久靡相之宜君之ま浪之共彼縁

此縁玉藻成依宿之妹乎ま王藻成靡寢之児乎まうらよ

みて男も女もまをやくうらうらまをま又まもびま

をうらうらむをま靡く藻よまうらうら且けうら

うはま字ま愛妻とまうらうらうらまもま

まもまゆりまのうらうらまのこ形うすなうらむをま

あり或人の蓬雲うらうらまのあれまうらうらんとていれま

ま山の雲の白手おまけふ常よ及れまうらうらまのま

まこれどまのまをまをうらうらまのまま

まうらまの浪の例もままはれまうら浪雲の借字ま

まぐり 万葉卷一よ名細吉野乃山卷二よ名細之狹谷島

乃卷三よ名細寸稀見海之云云冠録をかく四言ま

まぐり 乃く入てまうらうら吉野の名の至れるを名細とは

いふずれらに後冬も縮足もはきくは外郭式紀よすぐ
シテラ
 けし孫を茶紀よ花ぐり孫雄畧紀よ播都制能之孫播
シテラ
 阿野爾于羅虞波斯もどよまやせもよも皆回
ハツセ
 証シテラよ條シテラよ 且乞もまうかくひさらうまてハ冠辭もきりぬ。
シテラ

なまよよとの

ひいのらふ

万葉卷三 不盡の 奈麻余美乃 シテラ 甲斐乃 シテラ 國打 シテラ 録流 シテラ 駿河 シテラ 能
シテラ 國善 シテラ 云云 シテラ 生弓の返さうりをひよひかけさうり
シテラ 加倍利の倍利と及せ斐と 周禮よ シテラ 幹角を熟於火鑿
シテラ 膠法を奉て然則居早亦不動居濕亦不動苟有賤工必因
シテラ 角幹之濕以為之柔善者在外動者在内雖善於外必動
シテラ コトよ追伏し河
シテラ 角幹之濕以為之柔善者在外動者在内雖善於外必動

於内もいつりされが皇朝の古きうりて本のまくに化
シテラ 膠シテラ しき竹を合せたもさうりまうりハハハハハハハハハハハハ
シテラ 奉察式よ御梓弓の根を委くさうりまうり 膠シテラ も竹
シテラ も奉られぬハ延々古の御射まうりも本のかきりまうり
シテラ 一もさうりまうり大糸の大安寺法隆寺もがにあり古
シテラ さうりハまうりさうりまうりまうりまうりまうりまうりまうり
シテラ まれる新ニヒ らは動きまうりまうり。又續日本紀もまうり
シテラ くらを獻さうりまうりて集申まうり儀のさうりまうりまうりまうり
シテラ もまうりまうりまうりまうりまうりまうりまうりまうりまうり
シテラ くらにまうりまうりまうりまうりまうりまうりまうりまうり
シテラ くらにまうりまうりまうりまうりまうりまうりまうりまうり
シテラ くらにまうりまうりまうりまうりまうりまうりまうりまうり

なまよよとの

なまよよとの

万葉卷十三。投丸乃遠離居而思空不安國云云。ハ投

丸ノ遠ク飛を人のまを離きてあるふらひうけり。今

ハるげくさく アレベ ユカカリガツサラミルゴトニキミガオバシノ 草邊往雁之翅乎見別公之佩具之

投箭之所思オモホクよりあり且箭をばさくもいひく上つまご

ゆるの條よりふみよふまをさくもいひく上つまご

投丸のまをさくもいひく上つまご

ハ機ハネの校カをさくもいひく上つまご

のまハ和名抄の射藝類。遠射淮南子云越人學遠射

參天而發漢語抄云射遠 和名登保奈今今按 あり弋射

以豆 四聲字苑云增弋射矢也繳增繳所以加飛鳥也右

の鷹のつむご云云のまよりりてなぐるはらひいつる

矢をいひくまべられど卷十九の丈夫夜無奈之夕可在梓

引須惠布理於許之投矢毛知千尋射和多之ともいひ

を射遣るまを投るもいひく上つまご

○爾部

ふいぢり つかまをさく

景行紀。日本武尊のまをさく上つまご

磨利菟玖波鳩須擬臣異玖用加彌菟流 かこの人のまをさく

加餓奈倍氏用珥波虚々能比珥波苔鳩 ハハト

加鳩ハ常陸の新ぢりつつかまをさく上つまご

まげてゆく表うきを以て引つづくと片あはらりて四世の
 を御若中せしむる指をかきておふれが夜よて八九の板倉
 まて十日とせしむる指をかきておふれが夜よて八九の板倉
 名を新隼ニヒカリをつくとしひきりて次を八板の指りてのこま
 こと久ゆきをまをねておふておふとせしむる指をかきて
 大人かたひしむる指をかきておふとせしむる指をかきて
 せしむるのこまをいふる指をかきておふとせしむる指をかきて
 利つておふの指りてまを備せしむる指をかきておふとせしむる指をかきて
寺古の伝ははばり
 歴の伝は通し例さればいふる指をかきておふとせしむる指をかきて

天智元年あるはれりておふとせしむる指をかきておふとせしむる指をかきて
も上つ代おふとせしむる指をかきておふとせしむる指をかきて
 新治乃鳥羽能渡海毛とておふとせしむる指をかきておふとせしむる指をかきて
 名式おふとせしむる指をかきておふとせしむる指をかきて
 郡とておふとせしむる指をかきておふとせしむる指をかきて
 のおふとせしむる指をかきておふとせしむる指をかきて
 並奉りておふとせしむる指をかきておふとせしむる指をかきて
 けしむる指をかきておふとせしむる指をかきておふとせしむる指をかきて
ニヒカリ
 新治乃鳥羽能渡海毛とておふとせしむる指をかきておふとせしむる指をかきて
 ち治も多たれればつておふとせしむる指をかきておふとせしむる指をかきて
 の所をがらやく所の名をいふておふとせしむる指をかきておふとせしむる指をかきて

ふはにふ

あまごふすま

まらりつてふをさしてあまごふすまをさす人とも。

萬葉巻十四は、雑雨波爾多都安佐提古夫須麻許案
比太爾都麻余之許西禰安佐提古夫須麻とハ麻布の
倉さるるを先その麻の生ぬる處をいつして冠飾とせり。
りより引さるる事四巻九の巻を又さす。さすあまごの提ハ
多倍の及みて、麻多倍ハ麻布をりよと。和布と
爾佐多倍とも爾佐提とも云がゆ。おし手てお辭をさ付
られ、且麻ハきり細子作るを文園庭より作る。今の
民の戸よりゆり、戸令をさるるふ。古ハ民の戸に園を給

以麻乎をさ今
の平小麻乎と
あまごハ提之麻
手てハ麻布
のさるハ提干
は麻余ハ提干
同じく言テハ麻
乎と云ふは提

ふはにふ

あまごふすま

して物をうゑ生せむいよをさすの園やうて提さ麻庭
も立麻とも小垣内之麻ともあり。を四巻立麻乎
ヲガキチノ
前干布慕東女乎忘賜名。こハ前了をよまるとて。卷九ハ
垣内之麻矣引干妹名根之作服異六白細乃紐緒毛不解云云。
上の巻此未子つま余こせぬと云ハ神代紀子細よりりりり。あろ
すまにりいおふさるること。
せぬハ提すもあまご。
ふはにふと。あまごふすま

萬葉巻二は庭多泉流涙。卷十九は爾波多豆義流涙。
等騰米可禰都母。庭多豆水流涙云云。ハ俄泉の
流るるにひしひしと。和名お。潦。爾ハ大豆。雨水也。この

雨水ニハカイニよりよる忽泉ニハカイニより急なるをさるべし或況ニハカイニまた

まれの水をりつとほははるあしぬ解く弟系ニハカイニより

とづもよハ必流ニハカイニとよそいれ字ほり行濼路ニハカイニ上流

水とつり又庭タツミの立水のまをりふもろろ右タツミより泉多

豆水ヅミもどちよもつをほりて常ニハカイニよまをちてしぬ

小原ニハカイニより

おき長川 とうりあしひぬ
かづらうせ まいひゆけが

弟系ニハカイニ卷二十ニハカイニ雨保ニハカイニ村里ニハカイニ能於吉奈我我波半多延奴等母

伎羨キミニ爾可多良武己等ニハカイニ都奇米也母ニハカイニハ鵬ニハカイニ鷲ニハカイニれあ底ニハカイニ

入てさうろみ出てハ長くおつきて急なる息オキ乃長き志

よて息長川オキナガあつげーたのるべし古事記ニハカイニよ羨本ニハカイニ村理能

ふやまハ央も鴨
の聲といいと
くろくろく
くまくろく

加豆カヅ伎伊岐豆岐イキツキ万系イキツキよ志長イキツキも安イキツキ方イキツキろくろく

わ息カヅキをりてよぶまをさる。志長イキツキもハ即イキツキハヤもろく息

且潜カヅキの海人の水中より出てハ必長く息をつくるのれ

るをむろろろのよへーげ外志レナカの郊の志長レナカもレナカの係レナカよ

沈レナカをレナカ幸レナカふレナカしレナカらレナカいレナカ鴨レナカろレナカりレナカ又水中レナカより入レナカてレナカ久レナカくレナカあレナカらレナカも

れハ息の長きものことわざなるよろろろろろろろろろろろ

べんれと右の古事記ニハカイニよかづまをさるよみられ直ニハカイニよあづ

まの長きもろよまをさるんとまゆ。

於吉オキ奈我ニハカイニ波ニハカイニハニハカイニあニハカイニしニハカイニハニハカイニ道ニハカイニ江ニハカイニのニハカイニまニハカイニさニハカイニるニハカイニ事ニハカイニ殿ニハカイニよニハカイニろニハカイニりニハカイニ後世

を沖中川とまぬてしつこの沖よ出るまろ河川もこの類と
いつハ沼より息もろろ地の名より出て天の所名

み。王臣の氏もつり。於岐那我。波。我
のほろ字を。見。息長。も。ち。り。を。足。さ。や。

○卷五よ。浦保鳥能。布多利那良毗。為云云。卷十八よ。も。ま。つ。り。つ。げ。り。の。ハ。卷三よ。水鴨成。二人。雙居。も。つ。ひ。て。鴛鴨。此。類。ハ。必。雌。雄。ひ。ま。ぬ。も。あ。る。を。妹。と。ま。の。お。る。つ。び。あ。る。ふ。ま。つ。り。の。り。

○卷十四よ。浦保村里能。可豆思加和世乎。爾倍須登毛。曾能可奈之伎乎。刀爾多氏米也母。こ。ハ。み。や。ど。り。の。潜。を。略。ま。す。葛飭の地よ。こ。い。け。り。神功紀の。み。珥。倍。迺。利能。介豆岐。奈。卷四よ。二寶鳥乃。潜池水も。も。り。あり。かづき。ハ。拜を。額。衝。と。り。み。く。水。頭。を。衝。入。て。ま。の。ほ。に。

○可豆思加和世乎。爾倍須登毛。ハ。下。総。國。葛飭郡。ハ。作。れ。早。稻。を。い。そ。る。處。ハ。新。嘗。祭。と。る。を。い。つ。り。比。賣。の。中。ハ。い。つ。り。ハ。大。う。の。人。ハ。内。に。い。れ。さ。れ。と。か。き。あ。り。の。吉。せ。を。ハ。い。ま。し。て。ハ。あ。り。の。り。昔。ハ。も。あ。く。も。新。稻。を。非。ま。つ。る。を。い。ふ。ひ。ま。め。と。り。を。略。ま。す。と。い。ひ。く。大。掌。を。お。り。ん。べ。と。る。と。い。ふ。葛。飭。の。り。を。ハ。後。ハ。漢。て。い。と。を。よ。す。早。く。も。い。ハ。濁。へ。一。葛。ハ。り。よ。ア。か。ど。か。ら。ま。ど。ほ。り。あり。

○又卷十五よ。旅人毛。鹿子毛。許惠欲妣。柔深等里能。奈豆尤比由氣婆。こ。ハ。同。是。よ。於。伎。爾。奈。都。依。布。可。母。須。良。毛。都。麻。等。多。具。比。豆。了。よ。め。く。あ。か。も。波。の。よ。は。な。を。よ。ひ。て。あ。る。よ。私。の。よ。め。よ。を。略。へ。り。さ。し。け。法。ハ。ま。つ。む。を。返。て。た。の。づ。ま。い。ひ。て。や。ま。り。み。え。ゆ。れ。ぬ。返。へ。古。事。に。よ。阿。依。志。奴。波。良。許。斯。那。豆。牟。卷十九よ。

フルユキヲコシニナツニテ
落雪乎腰爾奈都美豆もどつる類ひ

よほろちや あまゝらう

こがまきよみよみしづの格りほのせよひせきせき
ーくびくびくろほていひーもやちほくさー先道
の湖をもほのろみてよもいふよーぞぞこしはあふ
みえぬよーし和名おのびふ乃野洲郡は通保の郷南北の
ま若その方まで通保湖といひーは越ての名れやくも
えんりー又神功紀のまよ勢多のわたりよよほよあふ二
そまよよりそぬもの人のいひもーいふまよいひ
てーいひこまよあてーいひーいひてーいひづの例

あふちの西武
いひこまよいひ
よま

よまあふちの西武
いひこまよいひ
よま

○奴部

ぬづり あまゝらう

古事記よハ千矛神サヲツドリキバシハトヨレ
のゆき 依怒都登理岐藝斯波登與年二万葉
卷十三よ野鳥雄動家鳥雞毛鳴云云ハ雉ハ野よ栖あ
抑つぎてよ群を冠しーむ即冠一もろけーいひ類
之且ちの依怒都登理の依ハこもろけーいひ類

鳥のちのこはぬづらりし四言よあむしり

ぬえづらり

しるしをなれは のいふまゝ

ヌぬえどれ

鳥系卷一は 奴ヌエ妻子鳥ト歎居者 卷十は 奴ヌエ延鳥之裏歎

座津ミシ 卷十七は 奴ヌエ要鳥能 守良奈氣之都 追云云 於此ハ

おれろおれろもーくーけーげるゝを人の哭泣ヲラヒヤクはなして

おろり古事記よ 八千矛神のつまこひ アヤ 阿哀夜麻爾 奴ヌエ延波那

伎キしよみあも おちしあむをよめていふくぬる

くはすゝまらる

○卷五よ 貧窮問 答の哥 奴ヌエ延鳥乃能 抑與比居爾云云これ哭

よんぬれんまはちのうどさく裏歎くも能抑与比と

もつゝをめて 或人の涙おろよるゝもさゝしんとてい

を武彦の上野は 実傳信都とらみさゝぐれぬ三井

寺は 住まぢりやぢい寺よ 奴え乃つて 山さきとて

てしむをへほくははけりしよをさるる音よ 耳

とほゝるをトくる 音一きアゑことかくり作りし

又土佐人大神垣守が 奴衣鳥ハ今の猿楽の笛乃

ひしぎつよ音れぬ 妻の時よりありたりておる

鳴るり 鴉よあよいさう大ききまを 鷺の羽のゆいよ

アアおのよ 和名お 鶴江沼 在鳥也とあれハ鳥

の類も 来るん 且 喉呼イハヒくもあ 涙おる

ぬむ玉の
 古事記よ。八千矛神。奴婆多麻能久路岐美祁斯遠云云。
 万葉卷四よ。卷七よ。黒王之云髮山乎。朝越而卷九よ。黒玉
 之。久漏牛方乎。卷二よ。奴婆珠乃吾黒髮爾雄畧。畧。農
 播磨能。柯彼能。矩盧古磨。卷十六よ。烏玉之。斐大。大。

黒。三首。八。満。 卷四よ。夜干玉之。黒馬之。来夜者。云云。
 卷二十よ。下。総。出。牟。浪。他。麻。乃。久。留。爾。久。根。作。之。云云。ハ
 防人の。か。い。言。ふ。年。浪。は。は。つ。つ。さ。ん。也。防人の。か。い。ハ
 防人の。か。い。言。ふ。年。浪。は。は。つ。つ。さ。ん。也。防人の。か。い。ハ

浪ハ波の浩
 多しあれをい
 てむむかといふ
 ことハ、ま、あ、り、し、う、
 ぬむ玉の、使、る、
 事、ハ、二、首、ハ、一、部、人、
 ハ、は、ら、ぬ、玉、の、麻、
 の、こ、と、を、い、ふ、を、
 云、ハ、

霧隠。ま。く。烏。玉。之。夜。霧。隠。 卷五よ。奴波多麻能用流能伊味仁越。卷十よ。黒玉宵
 霧隠。ま。く。烏。玉。之。夜。霧。隠。 玉也。烏。玉。也。回。り。ま。す。と。う。ち。を。い。は。し。

るをよしといひ何者和名抄に射干一名烏扇射音夜和名如良須安布

木又云考聲切韻云孤射干也関中呼為野干詰訛也

志りれハ万葉よぬもむ射干玉と云ハ心字あつて夜干野

干と云ハ音を借し且射干の實ハ黒も玉の如

あつて野よ生る物なりわの玉ハ野真玉といふ事なり

古ハ野を奴といふの清音と濁音の通ハ例あり野玉を

玉と云ハハの實の黒き玉に似れば推して字を

用ぬる物也烏扇の玉と云ハ略しりたり

これと云玉と云ハハの音を借しりたり

且烏ハ黒き玉と云ハ鳥の音よりりたり

古ハ野を奴といふの清音と濁音の通ハ例あり野玉を
奴は玉といひ且ハハの實の黒き玉に似れば推して字を
用ぬる物也烏扇の玉と云ハ略しりたり

或ハ鳥羽玉と云ハ古ハの如し又ハ人ヲ推しての如し

夏記日本紀萬葉と云ハ假字よりハ必奴婆多麻との

あて宇婆玉武波玉と云ハ事なり

かの喜撰式と云ハの如し黒きハハの玉と云ハ

右ハハの如し右ハハの如し

黒も物も云ハ月も何も假字ハハ奴婆多麻との

を玉玉鳥玉と云ハ事なり

よきはぐと云ハハの如し

又或説鶴羽也或説夜之異名也言欲讀黒之發語也

私記ハ師説鳥扇之實也其色黒ハ喩之也

是ハ私記の如し

是ハ私記の如し

ゆいさうしきまきりのん

○卷十一、人万呂、烏玉間、開作、貫結、縛依、後相物とのまよつて契沖
がりよ今の本よ、又バタノヒビシラミツ、ヒモヲムステシヨリ、ノチアツモカ
と点のハ、仙堂の萬葉抄をみるに仙堂の新点ニ、然るに白玉此右よ白
玉よあもるも、二さうありて、其よづさうれバ、烏玉を枕詞も置るよあ、
是す此体と、乃えさうの、其上開を志す、心、貫をいあ、と、
まら、好か、ハ、延喜式山口祭の注文、五色玉二百八十九、注、然、黒色
の玉、前、ハ、仙堂の黒色の玉、つ、り、あ、る、ハ、五色の玉の中、ハ、射干子を當
て用、る、射干子をぬ、り、ゆ、い、ハ、オ、十一、の、す、ハ、類を以て白玉、
く、ま、い、ハ、真、誤、者、の、ま、び、マ、二、の、句、より、ハ、契、沖、の、ま、
べ、初、句、の、説、ハ、凡、文、は、黒、玉、烏、玉、と、ま、て、ぬ、ら、ま、よ、ハ、射、干、子、
の、り、と、思、え、し、れ、ど、延、喜、式、ハ、水、精、ま、の、外、の、ま、く、の、ま、の、中、ハ、黒、
玉、と、あ、る、ハ、續、日、本、紀、よ、い、つ、る、ま、く、研、石、し、て、作、れ、る、ま、る、ベ、
代、こ、の、あ、れ、中、ご、ろ、の、世、ハ、皆、石、玉、を、判、中、ハ、黒、玉、と、ま、て、
子、を、母、ぬ、ん、り、う、ハ、や、む、こ、の、ぬ、ハ、玉、を、用、わ、し、事、ハ、
同、一、ま、い、さ、う、す、ハ、白、玉、ハ、の、ま、た、ま、く、の、み、あ、れ、る、ま、
辞、ま、い、で、烏、玉、を、よ、ま、ん、り、ま、あ、る、す、り、り、あ、よ、ま、
ま、れ、ま、よ、り、得、れ、る、り、あ、る、は、こ、れ、り、右、の、ま、
の、あ、い、ハ、お、ま、り、く、よ、み、て、ま、る、ハ、ま、の、

ぬえぐはの

めみられ

古事記

沿河ハハ
奴ハ延久ハ依能ハ賣ハ通志ハ阿禮婆ハ云云ハ

とくえ草の女とつげてまよ〜〜〜草のまき

弱女とてよえまら、且ハ奴ハと那ハの通ハよハまハのまハえハを

偃ハしハ類ハ上ハのまハ等ハ乃ハあハいハねハの廣野ハとハまハつ

ワ〜〜〜ハ〜〜〜ハ〜〜〜

冠辭考卷七

